

資料紹介・中国民間の仮面

(一) 鶏嘴面・猪嘴面

廣 田 律 子

日本の仮面研究者の中村保雄氏は、「仮面とは、その内部に超自然な靈力を宿し、その威力によって祝福をもたらしてくれたり、悪靈を退散させることのできるもの⁽¹⁾」としている。中国の民間に伝承されている追儺行事に使用される仮面は、まさにこの機能を当てはめることができるといえる。仮面に表現されているのは、人々の目の前に出現して僻邪慶進を行う神々である。

中国の仮面は、地域では西は西藏自治区から、黄土高原、雲貴高原、揚子江中、下流域とほぼ全域にわたって、また民族でも漢族をはじめとして、チワン族、ミャオ族、プイ族、トン族、イ族、トゥチャ族、ユーラオ族、ムーラオ族、チベット族、メンパ族、蒙古族の各族の間に広く伝承されている。

神々の面は、その外面的な特徴や役柄に見られる性格から分類してみると、老体の面、滑稽の面、雷神の面、將軍の面、判官の面、鬼神の面、動物の面に大別できる。老体の面は、土地神に代表される、いわゆる爺、媪の

面で、神格としては福をもたらす神々である。

滑稽の面は、歪んだ顔などで表現され、主に道化役として登場する神々の面である。

雷神の面は、雨を司る農業神としての性格と、また落雷によって悪人を罰する驅邪神としての性格を合わせ持つ雷公を表現した面である。

將軍の面は、『三国志演義』などに代表される歴史故事に登場する武將はもとより、横死を遂げたとされる地方色豊かな無名の武將を表現した面である。

判官の面は、鍾馗に代表される、官吏を表現した面で、悪人を裁く神格を持つ面である。

鬼神の面は、悪靈を降伏させる神格を持ち、角を生やし、目を怒らせ、口に牙を生やす、いわゆる日本の鬼に共通する形状を有する面である。

動物の面は、人々の生活に身近かな動物や、トートムとして崇拝の対象とされる動物を表現した面である。

中国の民間の祭りの場に登場する神々の面を一面づつ

取り上げ、面に表現された神々の素性を明らかにしていきたいと考える。第一回として、江西省で採集した、非常に珍らしい動物の面を紹介する。

中国の江南に位置する江西省の村々では、旧正月の祭りに、その土地に密着した仮面の神々が現われる。今回江西省の中央部に位置する樂安県の東湖村に伝えられている、鶏嘴、猪嘴両面について、面の使用される祭りの場も踏まえながら紹介したい。

この面は、その名の通り、鶏のくちばしと豚の鼻を特徴とする。鶏嘴面だが、木制で、目に当てる部分、耳の部分、口の部分の三つの部分に分かれる。目に当てる部分は、赤色に彩色され、横約一五センチ、縦約一〇センチの長四角の板の四角を丸く、上部は中央を彫り下げ左右が山形に丸く作られている。目は丸くくり貫かれ、目じりに黒い線が描かれている。鼻は山形に白く彩色した上にまじない文字の曇の字が描かれている。耳の部分は、上部がのこぎりの歯のようにぎざぎざに彫られた小片で、目に当てる部分とひもで結ばれている。くちばしの部分は、黒色に彩色され、高さ一〇センチ程の円錐形で、中はくり貫かれていて、口の部分に当てる、ひもで結え付けられる。

猪嘴面だが、やはり三つの部分から成る。目に当てる部分は、鶏嘴面と上下を逆にした形で、材質、彩色、大

きさ共に鶏嘴面とほぼ同じである。額の部分にやはり曇の字が描がかれている。耳の部分は、やはり鶏嘴面同様の小片が結び付けられている。鼻の部分は、竹制の高さ一〇センチ程の筒形で、全体は赤に先の部分は白く彩色され、黒く鼻腔が描かれている。

この二面が使用されるのは、一年の招福除災を目的として行われる旧正月の祭りの場で、『滾離神』（離神を沸かす）と称される。『滾離神』に登場する神々の面は、鶏嘴、猪嘴の他、白虎精、歪嘴婆々、鵝王、東岳、判官、小鬼、土地、状元など一九面を数える。全ての演目が上演されるのは、清源妙道真君を主神として祀る東湖村の離神廟と、特に災害や疫病の起った他村に依頼された時に限られる。『鶏嘴』と『猪嘴』の二演目は、正月四日から六日に東湖村村内で、七日から一五日に村外の依頼者の家で必ず演じられる。

『鶏嘴』と『猪嘴』の上演において、演者は一方の手に槍や弓矢や剣などの武器を執り、もう一方の手は三関手、五義拳、掌訣、剣訣の印を結ぶ。三関手は、親指と中指と薬指の先を合わせ、人差指と小指を突き出す印である。五義拳は、五本の指を握る印である。掌訣は、五本の指を広げる印である。剣訣は、人差指と中指を突き出す印である。武器を振りかざし印を結ぶことで、目に見えない邪悪な疫鬼を追い払うのである。

足の運びや舞の所作としては、足の裏の外側で地を踏みながら跳ねて回転する擺歩跳転や、頬に手を当てて足の裏の外側で地を踏む護腮擺足、弓を背中に載せて矢を射る反彈射箭などがある。左足を軸にして、時計と逆回りに次に時計回りに回転するなど、巫師特有の所作が見られる。

演者は、祭りの司祭も兼ね、楊先生と称されるが、楊姓の者に限られ、以前楊家に伝来していた『儺書』には、歴代の楊先生の名が二四〇も連ねられていたという。楊氏一族は、巫師として儺神を祀り、災禍を除く儀礼と仮面の舞を伝承してきたと思われる。

上演が行われる家の祭壇には、ろうそくや線香が点される他、供物として、碗に白米を満たしその上に赤い紙を載せ、またその上に油を入れた燈明皿を載せて供える。周田の家からも供物が供えられ、『鶏嘴』、『猪嘴』の上演後それぞれが家に持ち帰り、家々の祭壇に燈明が移し置かれ、その火で線香が点けられ、礼拝が行われる。その線香は祭壇の他、家の門口や裏口にも供えられる。

正月に『滾儺神』の祭りを行うことで、疫病などの災が除かれ、人々に幸福がもたらされる。ここで幸福をもたらす神々である鶏嘴と猪嘴は、人々にとって身近かな存在であり日常の生活の糧であるところの鶏と豚を表現している。こうした例は中国全国でも非常に珍らしく、

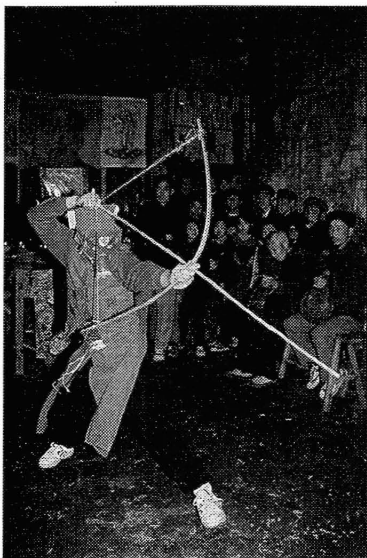
とても興味深い資料であるといえる。

地元の研究者の盧学軍氏の説明によれば、この地方で産される豚は、樂安の豚として全国に名を馳せており、歴代の皇帝への献上品であったので、人々の生活を支える家畜を疫病などから守護する神として、豚の神を登場させたのだということであった。また盧学軍氏は、洛陽で出土した後漢時代の卜千秋墓の壁画に描かれた、巨大な豚の頭を持つ人物が追儺を行う図を取り上げ、東湖村の豚の神に通ずると推論していた。

鶏や豚が神格を有するようになった背景には、種々な自然現象や自然物に精霊を感じる考えがあるといえる。

動物と夫婦になる異類との婚姻の話や、千年を経た動物は神通力を有するとする話などからも、人間と動物の距離の近さを伺うことができる。共に身近に生活をする動物を、疫鬼を払う追儺の神々の列に加えたのは、極めて自然な成り行きであったのかもしれない。

(1)中村保雄「神像から仮面へ」『芸能史研究』五一号、一九七三年。



『猪嘴』で弓矢をとる



『鶏嘴』で剣を取り掌訣印を結ぶ